

外国にルーツを持つ子どもへの「学びの保障」がもたらすもの —神戸市におけるKFCの進学支援の実践から—

金 宣吉、志岐 良子（特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター（KFC））

【要旨】

1980年代、90年代に起きた難民条約批准によるインドシナ難民受入、身元引受人制度改善による中国残留邦人帰国者の増大、入管法改定による日系人在留資格拡大、急増した国際結婚などによって外国にルーツを持つ子どもが日本に急増した。日本のような高度産業社会では、外国にルーツを持つ子どもの進学的重要性が認識されるべきであるが、正確な状況の把握さえ十分ではない。外国にルーツを持つ子どもの高校進学率は、日本人の子どもの50%～70%程度と推察されており、その原因として移住家庭をとりまくさまざまな問題がある。子どもたちが何につまずいているかを知ることができないと「学びの保障」について本質的に考えるべき視点も生みだしをえない。

本稿では、進学を阻む要因と進学を実現するための支援について、古くからの移住人多住地域である神戸市長田区における進学支援活動から考える。その上で進学支援の成果や課題を、移住家庭で育まれる母文化の継承や民族名の選択といった当事者である子どもの生き方も含めて考えたい。また子どもたちが成長するホスト社会である日本があるべき変化を遂げて受け入れているかという課題についても考察したい。

【キーワード】 外国にルーツを持つ子ども、進学支援、学びの保障

はじめに

1980年代半ばまで日本における外国人の子どもは、在日コリアンや華僑の子どもなど外国籍を持ち日本生まれで日本語を理解できる子どもが大半であった。

しかし円高による日本への出稼ぎ希望者の増大、1981年の難民条約批准によるインドシナ難民の受け入れ、1985年の身元引受人制度改善による中国残留邦人帰国者の帰国増、1990年の入管法改定による日系人3世までに拡大された在留資格、1980年代から急増した国際結婚などにより日本国籍保持者も含めた外国で生まれた子どもの渡日が広がった。

さらには、日本生まれでも保護者のうちの一方または両方が海外から移住してきたため、日本語や日本の習慣を理解しにくい子ども（2世）が日本に増えている。

これら外国にルーツを持つ子どもは、外国人学校やインターナショナルスクールといった教育機関を除くと概ね日本の公教育、公立の小中高等学校に通い教育を受けている。この数十年の日本における外国にルーツを持つ子どもの歩みや諸外国の事例を

見ても外国から移住した家庭の子どもの多くが、移住国（日本）で成人すると考えられる。

ところが、こうした子どもたちに関して、母語保障や文化活動といった「文化の問題」を取り上げることはあっても、子どもたちにとって日本社会との大きな壁となっている「就学・進学」の問題についてはあまり議論されてこなかった。日本における就職・就労の現状を考えたとき、教育における外国にルーツを持つ子どもの「高校進学」の重要性はいつそう認識されるべきであるが、現状は正確な状況把握さえおこなわれていない。

実際に全国の外国にルーツを持つ子どもの進学状況を先行研究¹や公表データをもとに推察しても高等教育、資格取得の分岐点になる高校への進学率は日本人の子どもより著しく低い。その原因として言葉の問題がクローズアップされることが多いが、実態は単に言葉の問題にとどまらず移住家庭をとりまくさまざまな要因が推察される。

本稿では、多くの子どもたちの希望でもある高校進学を阻む要因が何かということ、さらには進学を実現するための支援について、古くから在日コリア

金 宣吉、志岐 良子

ンや奄美群島出身者に代表される移住者が多数生活する神戸市長田区における特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター（以下、「KFC」と記す）の進学支援の取り組みから考える。その上で、外国にルーツを持つ子どもの進学支援の成果や課題を、単に子どもの進学実績のみで捉えず、移住家庭で育まれる母文化の継承や民族名の選択といった当事者である子どもの生き方も含めて考えたい。なぜなら進学支援の成果や課題を考える前提として、被差別の側に立つ外国にルーツを持つ子どもが落としこめられてきた情報の欠如や幼少期からの学習環境の劣悪さによる「学び」の価値観の欠落、学習意欲の低さや将来に対する諦め、セルフエスティームの欠如を考慮しなければ進学支援の意義を正確に捉えられないと考えるからである。

KFCの進学支援が外国にルーツを持つ子どもに「学力保障」と「進路保障」を重視することで日本社会への「同化」を促すといった短絡的な場ではなく、社会参加の機会を保障し、貧困や社会的排除の再生産を断ち切るために役立っているか。進学支援の取り組みを通じて、少しでも社会的排除から子どもたちを守り育てる場所をつくりだすことができているか。外国にルーツを持つ子どもが進学するにあたって何につまずき、何が壁となっているかを理解できるに場になりえているかを検証したい。

また進学支援に関わる支援者を通して、子どもたちが成長するホスト社会である日本があるべき変化を遂げて受け入れているかという課題についても考察したい。

本稿が、子どもだけでなく保護者、支援者、学校関係者といった外国にルーツを持つ子どもをとりまく人たちに進学支援（学習支援、奨学支援）がもたらすもの考える機会の一助となれば幸いである。

1. KFCの進学支援（学習支援と奨学支援）

1-1. 学習支援のとりくみ

(1) KFCとは

本稿でとりあげる学習支援の主体であるKFCは、1995年の阪神淡路大震災後にできた「被災ベトナム人救援連絡会」と「兵庫県定住外国人生活復興センター」という2つのボランティア団体が統合して1997年にできたNGOである。

KFCは、震災直後より仮設住宅の申し込みや多

重債務の相談や公園に避難するベトナム人たちのための炊き出しを行っていた。支援していた外国人被災者たちから日本語ができないことでの不便さを訴える声が上がリ、「日本語を学習したい」という要望から、川沿いの公園での青空日本語学習の場を設ける。その後、事務所を構え、マンツーマンレッスンだけではなく、グループで学習できる場、生活する外国人のための生活日本語学習の場の提供、日本語テキスト作成などに取り組んでいる。

現在のKFCは活動領域が広がり、マイノリティ高齢者の文化や言語にも対応した施設まで網羅した高齢者支援事業なども行っている。

KFCが位置する神戸市の西部地域にある長田区は、神戸港開港と沿岸部産業の発展にともなう都市労働者の流入に対応するため拡大された市域である。長田区は、神戸市が都市計画として中心市街地のスラム解消を目的に旧葺合区と旧林田区（現長田区）に木賃宿の建設を限定したこともあり低廉な住宅を求める移住労働者の集積が進んだ。長田区には、九州・四国・中国地方といった日本国内からの移住だけでなく、植民地であった朝鮮からの移住、日本国内に在住していた他地域からの在日コリアン移住も多く、古くから関西でも有数の外国人多住地域となった。特に第2次世界大戦戦後は、在日コリアンがゴムサンダルづくりを起源とするケミカルシューズ産業の興隆に深くかかわったことでより一層の外国人集住が進む。1980年代に入ると、兵庫県姫路市に設置された姫路定住促進センター出所後の在日ベトナム人が、言語的ハンディがあっても就労しやすいケミカルシューズ産業に集積されていく。これら在日コリアン、在日ベトナム人ら長田区の外国人住民は、単身の出稼ぎではなく家族を伴う構成であり、外国にルーツを持つ子どもの教育課題も古くからあり、今現在まで多層・多重化して継続している。

外国にルーツを持つ子どもが通う学校では、様々な子どものルーツ国にかかわる文化活動がおこなわれるようになり、場合によっては母語保障などへの取り組みもみられるようになった。他方で、日本人が住む国である日本という認識は払拭されず、「チョーセン帰れ」、「ベトナム帰れ」といった言葉に代表されるルーツ国と密接した表現の排除や差別が克服されず現在も続いている。こうした問題は、子どもたちの人間関係などに矮小化されること

も多く、日本人社会と少数者の間に存在する構造的差別は見過ごされがちである。

KFC が地域で認識してきた外国にルーツを持つ子どもの教育課題を列挙すると、①保護者の不安定な就労による貧困、②保護者の婚姻などによる国際間も含めた頻繁な移動、③日本語習得の問題、④母語または日本語習得の保障ができないことによる思考言語の欠落、⑤言語、文化ギャップが生み出す家族間のコミュニケーションの難しさ、⑥学校や家庭における学習サポート環境の欠落などによる低学力、⑦低学力と家庭の貧困が複合的に関係した(高校)進学困難、進学しても頻繁に起きるドロップアウト、⑧進学の困難さを背景とするライフチャンスの少なさと貧困の再生産、⑨社会から周辺化されることによる非行行動といったものである。

低学力や進学の課題は、外国にルーツを持つ子ども自身にもホスト社会にとっても切実な課題であるが、外国にルーツを持つ子ども自身や家庭に課題が還元され日本社会では取り組まれにくい状況である。

(2) 学習支援のきっかけ

KFC が学力保障を中心とした学習支援に取り組んだきっかけは、KFC が運営していた日本語支援教室に通う子どもの「宿題を教えてほしい」、「学校の勉強を教えて欲しい」という声をうけてのことであった。

この声の裏にある外国にルーツを持つ子どもの実情は、日本語で書かれた宿題を教えてもらえる人がいない、学校の勉強を教えてもらえる人がいないということである。学齢期の子どもにとって日々課される宿題を教えてもらえないことは、単に学校への提出物を出せないということにとどまらない。日本語での勉強を教えることができない家庭への子どものまなごしは諦め、時には恥ずかしさに繋がり信頼や愛着を失わせることも見られる。

学習においては、復習機能を持つ宿題ができないことは学習の定着、蓄積が得られず、学校の勉強についていけなくなる。結果、進学の道が閉ざされるという問題も起きる。

KFC では、2003年から2年間、夏休み期間などに短期間の宿題学習などを実施し、その後2005年より本格的に学習支援を開始した。学習支援を本格的に開始するに際してはそのミッションを明確化した。高校進学率が日本人の子どもに比べて著しく

外国にルーツを持つ子どもへの「学びの保障」がもたらすもの

低い状況を改善し、自分の夢や目標を持ち、自立自活できるよう高校進学をメルクマールとすることである。

高校進学を達成するには、中学生から学習を始めても時間的に難しいと考え、当初は小学生だけを対象に学習をはじめの予定であった。しかし、ある保護者から「中学生の兄も学習させて欲しい」という希望があったことで、当初から中学生も対象として活動することとなった。活動を開始した頃は、子どもは当初7名であったが、またたく間に子どもが増え、現在(2013年7月時点)では45名を超える子どもたちが週に1日から3日学習している。現在、小学生を対象とした学習支援は火曜日、水曜日、木曜日の週3日、中学生は水曜日、木曜日の週2日実施している。

学習内容は、渡日して間もない子どもは日本語を学習してある程度できるようになると、漢字など母国では学習しなかったものや自分だけではこなせない宿題をしている。日本生まれの子や日本に長期間住んでいる子で、宿題のサポートが必要な子は宿題をし、宿題が自分でできる子にはできるだけ発展的な学習をしてもらうように努めている。

ベトナムにルーツを持つ子どもが多いため、開設当初からベトナム語ができるスタッフが母語を使用して日本語・教科学習を行っている。現在はベトナム人留学生・社会人のボランティア支援者2名と、アルバイトでベトナム人留学生1名がベトナム語を使った日本語・教科学習支援に携わっている。

また最近では、KFC で学習した中国人大学生が中国語を使って学習支援なども行なっている。

小学校が学期末に作成する成績表「あゆみ」は、1年生では2段階、それ以降は3段階評価となっている。外国人の保護者は一番低い評価を付けられていても、1・2年生までは子どもの学習の明らかな遅れを把握しにくいのか、3・4年生になってから、「子どもの学習が遅れているから学習させて欲しい」と子どもの学習の申し込みに来る保護者が多い。

これまで、学習支援事業を始めてからの8年間には、学習支援以外にも様々な企画を実施した。2007年6～7月には、情報を入手しにくい外国人の子どもと保護者に複雑な高校入試のシステムや日本の高校について知ってもらおうと、通訳や翻訳資料をつけ、中学校教員による「高校進学ガイダンスと個別相談会」を開催している。その頃中学生だったべ

金 宣吉、志岐 良子

トナム人青年は、当時を振り返り、「(高校入試の情報とか) 全部 KFC で教えてもらった。僕、まだ覚えてる。(その高校進学ガイダンスの) 授業を受けて、(公立の工業高校3校の) 高校の名前とか覚えてたんです。私立やったら、お金かかるんやったら、行きたくないと思ってたんです」と KFC で情報を得て、進学先を決めたことを話した。現在では教育委員会主催のガイダンスも開催され、多言語での情報も受けられるようになっているが、数年前まではそういったことが実施されていなかったこともあり、保護者も中学生本人も情報を得られる機会が少なく、進学を諦めてしまう場合もあった。

その他にも、試験対策だけでなく、2007年12月には「推薦入試のための面接と作文の指導」を行った。渡日して3年たちやと進学意欲が湧いてきたベトナム人中学生が、この指導によって推薦で高校に合格を果たした。その後も推薦入試を希望するものがあるときには、現在も継続して支援してくれている中学校教員による面接・作文指導を個別に実施している。

また高校入試などの情報提供とともに、ロールモデルとなる先輩から話を聞く機会を設け、高校をどう選択したかや高校生活について語ってもらい進学意欲を高めてもらう機会も設けた。

加えて、年数回の交流会、中学3年生を対象とした夏休み集中学習クラス、カナダ人大学教員などによる英会話・英語クラス、子どもを暴力から守るワークショップ、そろばん教室なども開催してきた。

年に数件、就学前の子どもの学習希望も受けることがあり、2011年1月より毎年1～3月に就学前の子どもの学習支援や日本の学校のしくみを学ぶプレスクールも始めている。プレスクールの参加者は毎回3名から6名。通ってくる子はほとんど保育園か幼稚園には通っている。小学生以上の兄弟・姉妹がいる子は日本語の会話も問題なくできる場合が多いが、兄弟・姉妹がいなくて日本語での会話が難しいことが多い。

ただ保育所以外に習い事をさせていたり、外国人の保護者以外の日本語を話す大人と接する機会が多い子どもだとやはり言葉の数が多く、他の子どもと比較しても学習にあまり支障なく取り組める場合もある。

KFCの学習支援は、2013年からは拠点を神戸市東部へも広げ、長年地域に根付いて社会活動を展開

している賀川記念館と協力して、小学生と就学前の子どもの学習支援を拡大して実施している。

1-2. 学習支援が積み上げてきたもの

これまで学習支援にきた子どものルーツは、ベトナム、フィリピン、中国、ペルー、オランダ、コロンビア、パキスタン、ボリビア、インドネシア、アフガニスタン、ウクライナ、ロシアなどで、約200名を支援してきた。転居してしまった子どももいるため正確な数字とは言えないが、その中で母国へ帰国してしまった子どもは7名で、うち2名は親の強制送還など留資格の問題から帰国せざるを得なかった子どもでもある。また中には一旦帰国後、再渡日している者もいる。活動開始3年目ぐらいからは、対象者を公立小・中学校に通っている者に限っていることもあるが、この数字から定住し、日本社会で生きていく外国にルーツをもつ子どもが圧倒的に多いことがわかる。

KFCに通って中学卒業まで学習を継続しようとする子どもは一定の進学意欲があるため、やはり高校進学率は高くなっている(表1)。しかし、中学1年生でいじめに遭い不登校となり、中学3年生の年齢でKFCにきたものの、数ヶ月学習して、働き出してしまった子もいた。その子どもの家庭は再婚家庭で、義父との関係がうまくいかず、一人暮らしをすることとなったため、できるだけ早くに自活したいという思いがあったと思われるが、進学に向かわせられなかったのは非常に残念である。また高校進学したものの中退をしてしまった子どももいるのが現状で、高校進学しても、卒業するというハードルはまだ残っている。

通常、NPOなどが運営する学習教室は月2回や週1回、多いところでも週に2回開催しているという状況であり、KFCのように常設の教室スペースを持っており、メインのコーディネーターが常駐しているところは皆無といっている。

KFCの学習支援は、常設の場所があり、常駐スタッフがいて、子どもが常に相談に来られる体制がとれている。子どもは保護者が解決できない問題、例えば、学校の持ち物についてのお知らせや配布されたプリントについてわからないことを聞きに来ている。また家のガスが止まった、水漏れしている、家族が倒れた、など様々な相談も日々持ち込んでくる。

学習支援に来ていて既に高校卒業年齢となった27名の中では、就職は14名、進学は大学には6名、専門学校には2名が進んでいる（その他大学浪人1名、不明4名）。また高校卒業後、一旦、就職してから、自分で学費を貯めて、専門学校に進学したりほかにも現在働きながら専門学校への進学を目指し貯金をしている者もいる。大学・専門学校へ進学している者はほとんどがなんらかの奨学金を受給している。高校、大学への進学時には、保護者が家庭の経済状況を話すかどうかにかかわらず、経済面を気にしながら進学を検討している様子が見られ、外国にルーツを持つ子どもの家庭の経済状況の厳しさが垣間見られる。

1-3. 奨学支援のとりくみ

学習支援を初めて2年経った頃、学習支援に来ていた1人の中学生が経済的な理由もあり、高校進学せずに働くという道を選んだ。このことから、経済的な支援の必要性を感じ外国にルーツを持つ高校生の奨学金を設立したいという声がKFC内部からあがる。

そこで、兵庫県の外郭団体が私費大学留学生を対象とした大規模の奨学金制度を設けていたことから、

外国にルーツを持つ子どもへの「学びの保障」がもたらすもの

その規模より小さくても外国にルーツを持つ高校生の奨学金を設立してもらえないかと奨学金設立の必要性を訴え、外郭団体常務理事の理解も得られた。

マイノリティの子どもにたいする奨学金活動は、同和奨学金や朝鮮奨学会をはじめ重要な教育支援の活動である。しかし奨学金設立は、兵庫県の外郭団体の内部起案までされたが結果として見送られた。国際交流・国際協力事業中心の外郭団体において、日本で育ち学ぶ外国にルーツを持つ子どもの奨学支援への取り組みが位置づくことはなかった。

他の方法で給付制の奨学金制度設立ができないかとKFC理事会で議論する中で、外国人の子どもの教育に取り組む大学教員でKFCの理事でもある野崎志帆が責任者となり、奨学金設立を目指すこととなった。大学教員、行政職員、弁護士、地域活動に熱心な僧侶、教育関係NPOなどに実行委員就任依頼を行い、2007年11月に「定住外国人子ども奨学金実行委員会」を立ち上げ、給付制奨学金制度設立に向けて始動した。2008年から奨学金支給を開始している。

対象は、兵庫県下在住の外国にルーツを持つ高校生で、1学年3名採用、現在9名が奨学金を受けている。経済状況以外に、将来ロールモデルとなりう

表1 KFCで中学を卒業した子どもの高校進学状況

卒業年度	出生地	公立高校（うち定時制）	私立高校	就職	（うち中退）
2006年度	日本	1	0	0	0
	日本以外	0	1	0	0
2007年度	日本	2	0	0	0
	日本以外	1	3	1	1
2008年度	日本	1	1	0	1
	日本以外	8	3	0	1
2009年度	日本	1	0	0	0
	日本以外	2	2	0	0
2010年度	日本	0	1	0	0
	日本以外	2（2）	1	0	0
2011年度	日本	0	0	0	0
	日本以外	5（2）	0	0	2
2012年度	日本	1	1	0	0
	日本以外	3（2）	1	0	0
合計		27（6）	14	1	5

金 宣吉、志岐 良子

る人材になりえるかという点も選考時には重要な選考基準となっている。

どのくらいの奨学金を何人に支給するかを検討する中で、実行委員からの「進学意欲につながるようある程度意味のある額を」との声もあり、金額は月額 15,000 円、3 名であれば支給し続けられるであろうということで、支給金額と人数が決定した。また単なる奨学金支給というだけではなく、応援している人がたくさんいるというメッセージを送るのも奨学金事業の大きな役割である。

奨学金を貸与ではなく、給付にすることは当初から方針として決めていた。日本人でも奨学金の返還ができない人が増えており、政府が給付制の奨学金を設立するという話も出るようになったが、特に外国人の場合、家族が安定的な収入がないことも多く、国籍条項をはじめとし就職におけるハンディキャップもあるため、本人が返還するのも難しいことがあるため貸与ではなく給付とした。

運営にあたっては、大きな基金があつての奨学金ではなく毎年多くの人に協力をもらい子どもへ支給する奨学金であるため、当初、資金面は不安定であった。2 年目に、篤志家から一定額の寄付が集まり、現在は、今年 5 回目となるチャリティコンサート実施や神戸まつりなどイベントへの財源集めの出店、寄付で安定的な運営が出来るようになってきている。

1-4. 奨学支援が積み上げてきたもの

定住外国人子ども奨学金のこれまでの応募者 (表 2) と選考された奨学生のルーツ (表 3) は、以下の表のとおりである。

奨学生に選ばれた者には、イベントへの参加やコンサートでの登壇、年 3 回の成績表を持参しての面

接や交流会などの参加も義務付けている。奨学生同士・ボランティアの大学生との交流や、実行委員である大学教員などからのアドバイスは、学校生活や進学への意欲にもつながっており、これまで高校を中退してしまった者はいない。

これまで、奨学生となったのは、ペルー、ベトナム、中国、フィリピン、メキシコ、韓国などにルーツを持つ高校生たちである。卒業した 9 名のうち 1 名を除いて、大学、専門学校などに進学している。国立大学や有名私立大学に進学した者もあり、今後、様々な形で支える側に回ってくれることも期待している。

奨学生となった高校生たちは、年に 3 回、支援者の方への報告という形で、様々なテーマで作文を書き、近況や学習状況を把握するための面談を行なっている。面談を担当した実行委員からは、進学に関する情報量が少ないなどの声を聞くことが多い。

また就職の希望を聞くと、「自分の一番の取り柄である語学力を生かして通訳・翻訳の仕事にしたい」という奨学生が多いが、自分の日本語と母語の語学力でどの程度の通訳・翻訳ができるのかを把握できているものは少ない。

以下は、ある奨学生を面談した時の実行委員の記録である。

「大学進学についての知識、準備が進んでいないように見えました。大学の『理系』、『文系』の意味もわかっておらず、模試を受けて判定を見るという知識もないようでした。また進学に必要な費用もわかっていないようでありにも漠然としている状況です。家庭内の会話も母語のみで、読書も母語の本で、どうしても日本語の理解、語彙の習得が進んでいない状況にあり、『具体的』という言葉の意味もわかっておらず、進学希望者

表 2 「定住外国人子ども奨学金」への応募者数

	応募者数	ルーツ国
2008 年度	9	韓国・朝鮮 4、ベトナム 2、ペルー 1、中国 1
2009 年度	4	ペルー 2、中国 1、ベトナム 1
2010 年度	9	中国 4、ベトナム 2、ペルー 1、アルゼンチン 1、ブラジル 1
2011 年度	6	中国 2、フィリピン 2、ベトナム 1、韓国・朝鮮 1
2012 年度	11	フィリピン 3、中国 2、ベトナム 2、コロンビア 1、ペルー 1、ブラジル 1、韓国・朝鮮 1
2013 年度	10	中国 4、ペルー 2、フィリピン 2、韓国・朝鮮 1、メキシコ 1

表3 定住外国人子ども奨学金に選考された奨学生のルーツ

中国	5
ペルー	5
ベトナム	4
フィリピン	2
韓国・朝鮮	1
メキシコ	1
合計	18

の少ない学校（高校）のことも考えるときめ細やかなサポートが必要な状況だと考えます。アドバイスとして、学校の先生たちから適切な助言をもらうことの必要性を繰り返して伝えました。」

奨学生の中でも学校教員に相談できるものは、やはりきちんとした情報を得て、目標を持って学習もできている。しかし、早い段階から情報を入手し、目標を持った学習をしてもらうことができているのは僅かで、高校3年生頃になり慌てて進学について考え出し、望む進学先に進学できていない者も少なくない。

一方、うまく周りの支援者から情報や支援を得られたものの中には、AO入試などの大学入試制度をうまく活用し、例えば母語であるスペイン語の検定も受け、志望大学に進学していくものもある。奨学支援を通じて、外国にルーツを持つ子どもは、高校とちがって語学や厳しい経済状況、マイノリティ性が時に大学入試のアドバンテージとなるので、重要な進学・進路情報を提供することがいかに大切かも実感している。

2. KFC の子どもたち

2-1. 学習支援、プレスクールの子どもたち

外国にルーツを持つ子どもたちは、様々な困難を抱えている。

日本人と結婚した母親から呼び寄せられたものの日本では数歳上の姉と2人暮らしで食事をまともにとれていないような環境で暮らす中学生や小学生、再婚家庭で義理の日本人の兄弟・姉妹と言葉の壁などもありうまく馴染めない状況、母国で長年放置されたという思いから呼び寄せられても保護者とうまくいかないなど家庭での安心感が得られ

外国にルーツを持つ子どもへの「学びの保障」がもたらすもの

ないことや、保護者からの保護・監督下でない状況も見られた。これらも影響して学習意欲が低い子どもが多く見られる。

ここでは、これまでKFCの学習支援でかかわった印象深い子どもたちの事例を紹介したい。

(1) 渡日したくなかった子どもたち

生活費の確保や母国での就学のためなど様々な理由で一時期離れて暮らす親子がいる。呼び寄せられた時には親子関係が上手くいかなくなっていることも多い。

ある中国人の中学生は、親と離れて暮らしていた時のことと親と再会した時のことを以下のように語っている。

「小学校の時、中国でお父さんとお母さんが離婚してん。お父さんがアル中で大変やったから。お母さんは自分が小学校の時に日本に来て、日本人の今の父親と再婚してん。僕は中学校になって、呼び寄せられて、日本に来たんや。

中国にいたときはおじいさんとおばあさんに預かってもらってて、その数年間、全くお母さんは自分のことを心配してくれへんかった。中国ではお正月に新しい服を着るんやけど、全くお母さんは送ってもこないし、見かねた親戚のおばさんが用意してくれてん。

日本に来て数日はお母さんと中国将棋をしたり、一緒に過ごしたけど、すぐに仕事に行くようになって、ずっと1人やった。そのうち帰ってきたら、小言ばかり言われて、お小遣いもくれないし、喧嘩ばかりしてんねん」

日本に来日してからは、同じような経験をもつ子どもが学校にはおらず、友人もなかなかできずに、非常に寂しかったようだ。

本事例以外にも、母国では友人もいて、優しい祖父母に可愛がられ、たくさんの親戚も周りにいるという環境から突然日本にくることになり、日本語がわからないことでやる気をなくしてしまった子どももいる。母国では勉強ができたが、日本での生活が長くなると国に帰っても以前のように学習についていけなくなってしまっていることに気づき、半ば諦めのような心境のなか、本来の力を発揮できずに高校へ進学していく子もいる。

金 宣吉、志岐 良子

(2) 言葉の問題

子どもたちにとって日本語習得は大きな困難である。しかし、課題はそれだけに留まらない。例えば子どもたちが日本語を主たるコミュニケーション言語にしたとき、保護者は日本語ができないために、いろんな場面で子どもが家庭や学校での通訳としての役割を果たさないといけないことがある。ある中国からきた中学生は、保護者の仕事の面接に立ち会うことになったという話を下記のように話した。

「いややわ。また父親の面接の通訳で行かなあかん。なんで私だけ…。普通、親の面接に子どもが付き添わへんやろ。親が日本人やったらよかったのに。」

役所から来た文書を前に、南米から日本に来て数年の中学生を日本語の日常会話ができない保護者が「なんでわからないの」と怒るのを見たこともある。仕事をしているわけでもないのに日本語をほとんど学習もせず過ごしている保護者が、難しい行政用語がわからない子どもをどうして怒るのか、と疑問を感じもした。

保護者が日本語を理解できないことで、子どもは誰にも相談もできず様々な場面で判断を迫られたり、行政用語や医療用語などの難しい言葉の通訳をさせられたりと子どもの抱えるストレスは大きい。また保護者が日本語ができず、子どもは母語ができないことから、寂しさを漏らす子どももいる。

「お母さんは日本語も読まれへんし、話されへん。お母さんともっと深い話したいけど、私もそこまで中国語できひんからなあ。」

また、コミュニケーションがとれないことから、家庭では簡単な買い物さえままならないような状況も発生している。

「こないだ、おかんに買い物を頼まれてんけど、ベトナム語で言うから何を買ったらいいかわからへんかってん。ほんで、必死にジェスチャーをして、やっとなにを買ってきたらええんかわかってん。」

以上のように、親子の会話が「ご飯たべる?」「うん」程度の家庭も多く、母語はもちろん、日本語の語彙数も少なく、学習に支障をきたしていることも多い。また、夏休みなどに長期帰国することにより

家庭やルーツ国で過ごす時間が増え日本語に触れる機会が大幅に減ることで、せっかく進捗していた日本語能力が落ち、帰国後は学校での教員の簡単な指示さえ理解できなくなってしまうこともある。

(3) アイデンティティ・名前について

アイデンティティで悩んでいる子どもも多々見受ける。あるベトナムにルーツをもつ日本国籍の小学生が、「〇〇(自分)は何人なん?」と聞いてきたことがある。「ベトナム人だった両親を持つからベトナム系の日本人や。日本国籍を取ったから、ほかの国やったらベトナム系日本人とかいうけど。日本人やで」というと安心したような顔をしていた。

小学生ぐらいだと自分の家庭の外国人性と自分が日本社会に同化している状況を他者がどのように見ているかが気になるようである。その背景としては外国人が日本社会では排除されるという認識が子どもにもあり、影を落としているようである。小学校の途中で帰化をしたりすると、「あいつはほんまはベトナム人や」と中学にあがっても影で噂をされることがあったと語った子どももいる。

「やっぱり歴史の授業になったら出てくるじゃないですか。結構何かしら、ベトナム戦争や(ベトナムのことが)出てきたら、(クラスメイトが)ちらって見てみたり。」(ベトナムにルーツを持つ日本国籍の青年)

と、日本国籍を取得していてもルーツ国と繋がれることがアイデンティティを揺らすようであり、「ちらって見てみたり」する行為自体が、子どもに対してルーツへのネガティブな印象を持たせているような語りも聞かれた。

また名前についても、「妹が小学校に上がったらかのままの名前だといじめられるから、日本名をつけようと思うけど、どんな名前がいいか」という相談や、「弟は名前を日本名に変えるけど、自分は変えたくない」というような相談を受けたこともある。

ある4年生の時に渡日したベトナム人の小学生は、5年生の時に、

KFC スタッフ:「〇〇(本人のベトナムの名前)」

A:「僕は△△△△(本人がつけた自分の日本名)や」

KFC スタッフ:「ここでは、ベトナムの名前を使ってや」

A：「ベトナムに行ったらベトナムの名前を使う。日本にいるときは日本人になるから日本の名前を使う。将来は日本国籍をとるんや」

と話し、日本にいるときには日本人になりたい、という複雑な思いを感じた。

KFCでは、日本人性が圧倒的な力を持つ学校や社会状況を考え単純に学校での使用名を学習支援の場には持ち込まず、家庭で使用している名前（主に民族名になるが）を使うようにしている。学校では日本名を使用している子どもでもルーツを大事にしてほしい、出自を隠さず成長してほしいという姿勢からである。

名前に関しては、国際結婚家庭の子どもも多いことからどの名前がルーツを大事にする名前であるかは単純ではないが、家庭の外国人性や母語・継承語でも自由に話ができる環境のなかで「日本的でない名前」を呼ぶことで、安心してマイノリティである自分を認識して過ごして欲しいと考えている。

また日本で使っているカタカナの名前が既に自分の名前ではないと感じている子どももいる。

「中学校で名前変えてん。外で使うだけやから別にええやん。小学校の時使ってたカタカナの名前も別にちゃんとした本名じゃないもん」

この「ちゃんとした本名じゃない」という子どもの表現には、外国人の名前は、カタカナで表記するという日本の慣習と外国人の子どもの本名が持つギャップを表している。ベトナムで生まれた子どもにとっては、漢字、ひらがなの「氏（うじ）」、「名前（なまえ）」で構成される日本の名前が標準のなかにミドルネームがありアルファベット表記される自分たちの名前を、正確な発音表記も難しいカタカナで単に対応させても既に名前が変わっているという感覚があるようだ。

名前を尊重するという事は、異なる文化への深い理解であるということ子どもが示唆している。

神戸市におけるベトナム国籍の子どもの学校での本名使用率は、1998年に91.7%だったものが、2012年には45.5%と大幅に下がってきている。このことから、カタカナのベトナムの名前を使用し、日本人でないことが認識される状況をベトナム

外国にルーツを持つ子どもへの「学びの保障」がもたらすもの

人の子どもが、学校生活を送るなかで忌避してきていることは明らかである。

（４）学校のでできごと

子どもが一番長い時間生活するのは学校である。学校に関して語られることでとりわけ印象深いの、いじめや教員の無理解、サポーターの嫌がらせなどである。子どもたちは孤立無援のなか通学している。

あるフィリピン人の小学生は、

「給食の時間に、おなかが痛くなって保健室に行っせん。給食当番の日やったから、みんなに、『当番さぼったやろ。フィリピンに帰れ』って、言われてん。おなかが痛かったから保健室行っただけやのに…。死にたい。」

と話し、また別の日にも

「今日、いじめられた。先生がいない時に、漢字テストがあつて、みんな見せ合ってたのに、〇〇（私）が見せてって言っても見せてくれなかつてん。」

日本人同士でもある嫌がらせなのかもしれないが、外国にルーツをもつ子どもたちには「フィリピンに帰れ」、「ベトナムに帰れ」、「中国に帰れ」という出生を揶揄する言葉が投げつけられている。そこに日本の学校での外国にルーツを持つ子どもの人権の取り組みの薄さを感じずにはいられない。

また学校教員との関係でも様々な問題が起こっている。

「（日本に来てから）クラスメイトの『あほ』とかけなしている言葉は早くに分かるようになった。いやなことを言われていることがわかったから、言い返したかったけど、日本語ができないから、手を出した。そしたら、担任の先生が『謝りなさい』と理由も説明できない自分をクラスメイトみんなの前で謝らせた」（ベトナム人青年）

という語りがあった。学校ではこのような対応が取られており、理由も聞かれずに一方的に謝らされるという形でただその場を収めるだけの対応が取られている。

その他にも、兵庫県では、子ども多文化共生サポーター制度という日本に来たばかりの子どもに

金 宣吉、志岐 良子

は母語ができるサポーターが週1～3日派遣される制度があるが、そのサポーターとのやりとりで問題が起こり、嫌がらせを受けたと保護者から訴えがあったこともある。

「スペイン人と結婚した日本人がサポーターとして来た。子どもがペルーの歴史（昔、スペインに金をたくさん盗られた）の話をしたら、サポーターからの嫌がらせが始まった。小学校の入学式に正装でいくということを教えてもらえなかったし、子どもも嫌がらせを受けた」（ペルー人の保護者）

このように単に母語（スペイン語）ができるからというだけでサポーターとして派遣することで、トラブルになっている。教育委員会が宗主国と植民地といった状況を把握し、母語ができる事以外の要素も加味して、派遣を検討する必要があるのではないだろうか。

また、サポーターによっては「私は通訳ですから、日本語は教えません」という者もいる。サポーターの地位の向上とともに、サポーターの役割の明確化や子どもへの接し方など研修し改善させる必要があると考える。

サポーターの中には、サポーターの限界をしっかりと把握し、子ども自身が自分で学習できる力をつける、自分で学習する方法を教えるといったように、指導している人もいる。一方で単なる時給の高いアルバイトになっている人もいる。

学校によってはサポーターが、保護者へのお知らせの翻訳に追われ、子どもと接する時間が非常に限られてしまっていたりとはほかの課題も多い。

3. 「学びの保障」のもたらすもの ～子どもたちの声から～

3-1. 子どもと家庭にとって

子どもと家庭にとって、学習支援がなにをもたらしたのか、青年となった彼（女）たちや学校教員の語りから明らかにしたい。

「僕が（KFCに）来ていた時はですけど、本当に周りが日本語がしゃべれへん子ばかりで。（中略）それでちょっと入りやすかったです。『ローマ字がわかんないですけど』、みたいなん言ったところで、日本語しゃべれとるから。（中略）全然ましやと思って。個別指導で自分に合わせてく

れるのが良かったです」（中学校時代に学習にきていたベトナム人青年）

中学入学当初、保護者に連れられて数ヶ月母国ベトナムへ一時帰国し、その間学校での授業が受けられず、中学2年生になってもアルファベットを理解できていなかったが、個別学習で自分に合わせてローマ字から教えてもらえたことがよかったと語っている。

「勉強する時間を設けることができた。ここに来ることで。家においたらしなかつたろうと・・・」（中学校時代に学習にきていたベトナム人青年のインタビューより）

A：「塾って先に予習じゃないですか。今、ここがわからへんのに予習して もわからないじゃないですか。ここに来たら、『今日はここが授業でわからへんかった』って言ったなら、おさらいができるので、それがすごくよかったですね。」

KFC スタッフ：「勉強はそれなりに効果があったと」

A：「そうですね。高校にも入れたので。」（中学校時代に学習にきていたベトナム人青年のインタビューより）

「めっちゃ教えてくれて、結構多分、成績も上がったと思う。」（中学校時代に学習にきていたペルー人青年のインタビューより）

学習に関しては、個別のニーズに応えてくれたのが良かったという声が多数聞かれた。また日本語を学習しているもの、宿題を学習しているもの、学年を落とした教科学習をしているもの等、学習内容がそれぞれであることから、自分の学習内容を恥ずかしいと思わず学習できる環境でもあった。

KFC スタッフ：「何か私たちが（KFCに）来ている子どもたちに）できることあんのかなあ」

A：「あー、ありますよー。話聞いてもらっただけとかでも。」

外国にルーツを持つ子どもへの「学びの保障」がもたらすもの

KFC スタッフ：「あるの」

A：「あります、あります。私は（ここに）来たら、Sさんとかに話聞いてもらってたじゃないですか。」

KFC スタッフ：「うん、うん。」

A：「（家に）帰ると、普通に喋る、伝えるだけしんどくなるんですよ、親に。だから普通に日本語で喋るだけで、通じ合うのが楽なんですよ。だからそれだけでも全然違うんですよって私は思いますけど。」（中学校時代に学習にきていた青年のインタビューより）

またある小学校教員は以下のように話した。

「B君が、この間『先生見てみて』とうれしうに連絡帳を持ってきたんですよ。これまでお母さんが連絡帳になにか書く事がなかったから、KFCの先生にサインとか連絡を書いてもらったのが嬉しかったみたいです」

というように、家庭ではコミュニケーションの問題から十分に話せないことを、KFCの学習支援教室では聞き、時にはアドバイスしたり、サポートしたりということがある。学校で楽しかったことであったり、今運動会の練習でこんなことしている、というようにたわいもないことから学校での嫌がらせ、保護者への不満など様々な話におよぶ。日本の学校教育を受けていない保護者には、いちいち説明が必要であったり、その説明が言葉の問題でできなかつたりということをKFCの学習教室では受け止め、家庭の役割を補うような役割も果たしてきたと言える。

また「ここへ来ると調子に乗っていた」「ありのままの自分が出せ」という声も聞くことがあり、日本人の子どもばかりの場から解放される場の提供ともなっている。

KFC スタッフ：「じゃあ、KFCに同じ環境とか同じ背景の人がおるのが良かったってこと」。

A：「うん。何か、『こうこうこういうことあってな』みたいな感じ

でしゃべってって、『ああ、わかる、わかる、それ、わかる』みたいな感じ。『ある、ある』みたいな。」

KFC スタッフ：「ベトナム人の親やったら、それ、あるというのは、何か具体的にある。

親に言ったってわからへん。日本人の親やったらわかるけど、ベトナム人の親、こんなわからへんねんとかみたいな話。」

A：「ある、うん。もう多分半分くらい親の話やで。」

KFC スタッフ：「何か1つか2つ、思い出せるようなことあるか。」

A：「何かな、うち、うちはあつたっけな。何かベトナム人の親のキレルポイントがわからんというのと。」

KFC スタッフ：「ああ、親のキレルポイントが、ベトナムなん。」
「それがみんな、『そうそう』って感じなん。」

A：「うん。『わからん、わからん』みたいな感じ。」（中学校時代に学習にきていたベトナム人青年のインタビューより）

以上のように、ベトナム人の保護者を持つ子ども特有の話ができて楽しかったと学校では話せない家庭での（文化の）話ができたと思い出を語る者もいる。

KFC スタッフ：「自分の周りにとっての、同じ世代とかのベトナム人との輪みたいなんはあるのかな。」

A：「輪はないですね、正直言うと。私の学年も、学校とかにも（ベトナム人が）いなかったんで、他校には探したらいてるけど、私の行く学校、行く学校にはいなかったりしてたんで、本当になかなか、KFCでできた友達が自分の中の輪みたいな。それも、今も結構長いこと続いているんで。」

金 宣吉、志岐 良子

KFC スタッフ：誰と仲よくやってたの。

A：「M と仲よくしてますし、I ちゃんとか。夏になると、去年も行ってたじゃないですか、花火、これからするみたい。結構、年に1度か2度ぐらいはみんなで集まって、公園で花火して、最近どないとか話したりはしてますね。」

KFC スタッフ：「ベトナム人というよりはKFC（の輪）でやってる。」

A：「そうですね、いろんなもう、はい。」

KFC スタッフ：「同じように外国の血を引いている人たちの輪が、それは続いているって感じ。」

A：「そうですね。」（中学校時代に学習にきていたベトナム人青年のインタビューより）

A：「中学は余りしゃべれなかったです。こっち（KFC）に来て、ちょっとずつしゃべれるようになって、高校でしゃべりました。」

KFC スタッフ：「しゃべる訓練したのはKFCやった。」

A：「多分、それです。多分、意図的にじゃなくって、本能的に。」（中学校時代に学習にきていたベトナム人青年のインタビューより）

このようにKFCを卒業したあとも続く友人関係が築けた子どもたちもいる。そして、KFCが支援者やスタッフと気軽に話すことができることから、高校での友人づくりにも役立っている子もいることがわかった。

3-2. 支援者とホスト社会にとって

これまでKFCの学習支援は、大学生、留学生、リタイアしたシニア層、主婦などたくさんの支援者（ボランティア）に支えられてきた。大学生・留学生は、外国語大学の学生や国際系の学生だけでなく、大学の教員や大学のボランティアセンターなどから情報を得て様々な学部が学習支援に参加してくれている。

支援者は、子どもと接するだけで元気になるから継続できているという人や、自身の子どもの時代の経験から経済的・言語的ハンデを緩和してあげたいという人、海外生活で自分も助けてもらったから恩返ししたいという人、これまでの教師経験を少しでも役立てたいという人たちである。子どもに「わかった」という瞬間が提供できたり、成績が良くなるのが最も大きな喜びだが、子どもからベトナムのことや中国など母国のことを聞かせてもらうことも、支援者の楽しみの一つになっている。このように「やりがい」や「いきがい」、留学を考えている一部の学生の「自分磨き」にもなっている。学生の中には、教員、保育士を目指すものもおり、社会人になった時に外国にルーツを持つものへのまなざしを持ってもらうことも期待している。

また、支援者は、子どもの学習を支援するだけでなく、活動資金の寄付や子どもが楽しみにしている休憩時間のお菓子の差入などの協力もしてくれる。あどけない外国にルーツを持つ子どもを支えたいという思いが原点であると思われるが、支援を通して子どもの置かれている厳しい状況の理解が進むと多くの人が子どもへの理解を深め、子どもの努力を背景も加味して認め、自らの友人などへ支援の輪を広げてくれる。

外国人犯罪などネガティブなイメージが蔓延している現在、外国にルーツを持つ子どもの可能性を広げる支援は、「日本人」にとっても貴重な支援となっている。

ホスト社会にとっては、どうだろうか。学校でこぼれおちてしまっている子どもが、KFCにやってきがちである。学校教員も問題を抱えた子どもをKFCに連れてくる。学校で手に負えなくなった子どもたちを引き受けているKFCを、ある研究者は学校の「下請け」と表現した。社会の問題解消に向け自主的に取り組むはずのNGOが、「下請け」と評され、いささか憤慨するところもあるが、学校から排除され、こぼれおちていく子どもを少しでも包摂しないことには、将来社会のお荷物となってしまう可能性が高いことを考えると無給の「下請け」を続けるしかない。

前述したように、外国にルーツを持つ子どもは、置かれている状況が十分に理解されていないために能力にあった学力の保障を受けられていない。その上、本名（民族名）を名乗れる取り組みも少なく、

出自を明らかにしづらくなっている学校の中で、理不尽な状況を理解し変える力を奪われている。そのことは、決してホスト社会にとって望ましいことにならない。

外国にルーツを持つ子どもが、学習し、解放される場所が育む子どもの成長は、結果として地域を支える大人が生まれることに繋がる。

外国人の「外国」に目が向くかぎり、外国にルーツを持つ子どもの日本での「学びの保障」を多くの人が理解することは難しいかもしれないが、目の前にいる外国にルーツを持つ子どもの声に耳を傾ける姿勢を持てば、「宿題を教えてほしい」、「学校の勉強を教えて欲しい」という子どもの声が意味する日本社会の課題を理解することは難しくない。

日本人のほとんどの子どもが高校進学、卒業によって学力を育み、その中で人間関係をひろめ自信を持ち、夢や希望も持つ中で、ホスト社会を支える一員となっていく外国にルーツを持つ子どもの進学・就学のハンディを補う社会資源はどこが担うにしろ必要である。

現状では、学校や家庭だけでは果たせない環境を整えるための一つの機能として、KFC が作りだしてきた「学びの保障」の場が不可欠となっている。

3-3. 「学びの保障」をとりまく課題

兵庫県には、大阪府や奈良県にある外国人の高校特別入学枠といったものが存在しない。そのため、中学校での成績が振るわない子ども（この地域では下位 40%程度）は、学費の高い私立や定時制、単位制といった高校を選ばざるを得ない状況がある。家庭的にも経済的に厳しい環境にある外国にルーツを持つ子どもが、経済的負担が大きい私立高校や中途退学率の高い定時制、単位制を選択せざるを得ない状況は、結果として在日外国人の困窮の固定化、貧困の再生産に繋がっている。

このような厳しい状況を克服し、なんとか高校進学をしても問題はあつた。KFC の活動目的が（希望する）高校に進学することとなっているため、支援が中学生までに限られてしまっているが、高校へ入っても日本語の問題などから、学習についていくのが難しく、留年・中退する子どももいる。この状況を改善したいと思うが、中学生の支援者が不足している現状から考えても、高校生の学習支援に踏み出すことは難しい。

外国にルーツを持つ子どもへの「学びの保障」がもたらすもの

学校、保護者との連携にも課題がある。第一に、神戸市教育委員会が 3 年前より開催している学校と NPO などの地域の学習教室の交流会により、小・中学生が地域の NPO などの学習教室で学習している実態は学校でも把握されるようになってきた。また、この交流会が開催される前も KFC に来ている子どもが通う学校の訪問は何度か実施もし、学校に認知してもらえるように努めてきた。しかし、数人の熱心な先生は学習している様子を見に来ることもあるが、学校現場との連携はなかなか取れていない。

第二に、保護者との連携も難しい。学校のように個別懇談会を実施したり、高校進学のための情報提供の場を開催したり、保護者向けに子どもを暴力から守るためのプログラムを実施するものの、どうしてもその場限りになってしまう。保護者に「これこれこういう宿題がでるから、学習したかどうかの確認だけでもしてください」と頼んでみても、日本語の理解が十分でない保護者からは「わからないから、おまかせします」と言われてしまうことも多い。保護者の日本語力、教育への関心が高い場合には、やはり子どもたちの学力や進学意欲が高くなることが多いため、保護者に「おまかせ」ではない関わりをする必要性を理解してもらわなければならない。保護者が小学校低学年ぐらいまでは宿題のサポートを行っていたり、保護者自身が学習をサポートできないときには様々な学習の場を探し利用して、子どもを学習させている保護者もいる。「その頃はすごく忙しくてしんどかったけど、そのおかげで日本語もできるようになったので、今は親には感謝している」という子どもの声もあり、保護者の教育への関わりをいかに増やしていくかも大きな課題である。そのためにも保護者に早い段階で日本の教育システムや外国の子どもたちのハンディキャップ、ライフチャンスを増やすための高校進学の必要性を理解してもらえる場の設定が必要である。

3-4. 「学びの保障」のもたらすもの

以上のように、KFC の進学支援は、子どもを中心として、保護者や支援者などへ様々な「学びの保障」を行ってきた。進学支援の結果、高校に進学し卒業できた外国にルーツを持つ子どもは、正社員で働く機会を得ている。また転職しても正社員で働くことができている場合が多い。

金 宣吉、志岐 良子

一方、高校へ進学できなかったまた進学しても卒業できなかった子どもは、アルバイトなど不安定な雇用形態の中で働き、希望する職種への転職がままならないこと状況が見られる。ある高校を中退してしまっただトナム人青年は、「これ（靴の製造の仕事）しかできないですやん」と話した。日本で中学・高校を卒業し、母国中国企業で就職できた中国人青年がいる一方、同じようにできれば中国企業で働きたいと考えても高校を中退してしまい、「高校卒業していないから僕は（中国でも）雇ってもらえない。不安定でも日本で働くほうが収入になるから、日本で働く」という青年もいる。

このように、将来どこで生きていくとしても、ライフチャンスを広げるためには高校進学・卒業が必要となっている。最低限、高校卒業することで、その後、希望する職種への転職や就職後に専門学校などへ進学することも可能になっている。岐路となる高校への入り口と出口の門を通ることがいかに大切かを、青年になった外国にルーツを持つ子どもたちがわかって、学びなおしが難しい日本ではチャンスは少ない。

そのためにも学校現場ではできない、NGO だからできる個別学習の強みを活かし、それぞれの子どものにとって必要な学習を見極め、かつその学習が子どもにとって楽しい場づくりがいる。現状は、特別入学枠などのアドバンテージがない限り外国にルーツを持つ子ども自身の努力では高校の門は高い。それでも進学をあきらめずに学習できる環境づくりは、子どもにも支える大人にも高校進学というメルクマールを超えた「学び」を提供してきた。

前述した靴製造に従事しているベトナム人青年は、学習支援の場で出会った子どもが自分をサポートしてくれたこと、自分が後から来たベトナム人の子どもをサポートしたことを語っている。外国にルーツを持つ子どもが出会い、相互扶助できる場にも KFC の学習支援はなった。日本人ではない自分と同じ子どもが隣にいることの解放感、学校や子どもとコミュニケーションが取れない家庭の溝を埋める補完的役割、情報が不足しがちな子どもへの身近な相談所としての機能等、進学を支援する中でもたらしてきたことも子どもの語り等から見えた。進学支援を支えるリソースが少ない現在、支援者や活動資金の確保など困難も抱えているが、地域にこのような施設があることで、学校や保護者だけでは与

えられない「学びの保障」を提供し、子どもが生き生きと生活を送れる可能性が高まることを支援を受けた青年たちは教えてくれた。

子どもたちが成長して、日本社会を支える一員となっているたくましい姿をみると、支援する側も力を与えてもらえている。進学支援がもたらすものは、決して一方向的ではなく、弱い環境で育つ子どもに冷たい「世間」に異議を持つ人たちは実は支えてくれている。

外国にルーツを持つ子どもが自立・自律し成長した後のホスト社会に与える社会的効果、経済的効果を示しながら、進学支援活動が生み出す「学びの保障」の大切さ、必要性を今後も広げていきたい。

4. おわりに

本稿は、外国にルーツを持つ子どもの進学支援から見えてきた「学びの保障」の大切さを伝える機会を作ってくれたことがきっかけで書かれたものである。外国にルーツを持つ子どもが発する「どうせ頑張ったって…」という言葉に集約される焦燥、諦め、絶望、それを持たせる世間の冷たさに抗って活動する人の思いの一部でも文字にできていたならと考える。

KFC の進学支援は、多くの「国際化」が好きな人が求める「外国人らしさ」に応えない活動である。国際交流、国際協力中心のいままでの路線とも主流となりつつある言語・文化中心の「多文化共生」路線とも違う外国にルーツを持つ子どもの「進学」を支える活動はこれからも地味で光があたりにくいかもしれない。しかし、自分探しもアイデンティティづくりも大人が大人として子どもの将来を考え「学びの場」を作れてこそではないだろうか。そのためのメルクマールとしての進学にこだわる姿勢をこれからも KFC として持ち続けたい。そのためには、その意義をもう少し丁寧に深く掘り下げる必要がある。多くの人が理解、共感できるようにしていくことが持続には必要であり、教育事業は続けていくしかない。

本稿を KFC の進学支援を担当してきた筆者の一人である志岐良子の思いを伝え終えさせてもらいたい。

学習支援・奨学支援を受けていた彼（女）ら外国にルーツを持つ子どもが今、高校を卒業して、大学進学や就職をし、イベントや学習支援活動を手伝う

など、支える側にも徐々に回ってくれている。外国にルーツを持つ小・中学生たちにとっては、ロールモデルとなる先輩たちと出会い、進学意欲を高め、母語で安心して話ができる時間を持つ機会となっている。

これまで活動を続けてきた筆者としては単純に関わりを持ってもらえることだけでも嬉しいことだが、それだけでなく批判の対象となりがちな外国人支援におけるパターンリズムから明確に脱却し、当事者性を強め、今後はより主体をはっきりさせた形へ活動を少しずつ変容させていきたいと考えている。

日本人である私が外国にルーツ子どもと関わることには一定の限界がある。これまでそれを埋めてきたのが、KFCの理事長であり、もう一人の筆者でもある金宣吉である。外国人として、日本で教育を受け、社会人としての経験も持ち、そして現在は当事者として、外国人支援をしている。これまで、学校や社会での、疎外感やいらだち、一部の支援者として関わる人たちのいい加減さ、そして当事者自身のだらしなさなど、様々な思いを感じて活動してきている。

当事者として日本社会で生き、日本社会にだけではなく、当事者にも厳しい。一方、当事者ではないことから当事者へ厳しい目を持ってないことも多い筆者は、運営方針などで対立することもしばしばあった。どんなに日本に来てまだ日が浅くても、どんなに日本語が不自由でも、いったん社会に出たらそのような事情は考慮されないのが「普通」である。「できないものはできない」と切り捨てられるのが社会の常であるというように（志水 2008:21）、KFCの活動が、社会で自立・自活できることを目的にしている限り、子どもが社会に出ていくことを想定した活動でなければならない。子どもの将来の自立・自活を暗に妨げてしまっているかもしれない筆者自身の甘さを自覚し、戒めながら、これからも活動を続けていきたい。

謝辞

本稿は、国際ボランティア学会会員である愛知淑徳大学の小島祥美さんが機会を作ってくれたことと大阪大学の山本晃輔さんがKFCの子ども支援から巣立った青年たちへの調査に協力してくれたことが大きな力となった。まず二人の若き研究者に感

謝をしたい。

謝をした。

また本稿の前提となるKFCの外国にルーツを持つ子ども支援は、「日本人」であることが前提となる社会で「生きづらさ」を抱える子どもへの就学・進学、奨学支援の必要を考え、実践してきたたくさんのボランティアによって支えられている。日々の外国にルーツを持つ子どもの成長を支えてくれているKFCのボランティアにあらためて感謝したい。

最後に書くことが苦手なNGOのスタッフにこの拙稿を出す力を与えてくれたのは、厳しい環境のなかでもかかわる大人たちに笑顔やひたむきな姿勢で楽しみや喜びを与えてくれたKFCの学習支援に来ている外国にルーツを持つ子どもたちであった。日々、問題もたくさん起こすが成長した姿で希望をあたえてくれているKFCの外国にルーツを持つ子どもたちに心から感謝したい。

【注】

- 1) 例えば、乾（2008）、鍛冶（2007）、大曲ら（2010）、高谷ら（2013）が詳しい。

【引用文献】

- 乾美紀. 2008. 高校進学と入試. 志水宏吉編. 高校を生きるニューカマー. 明石書店.
- 大曲由起子・高谷幸・鍛冶致・稲葉奈々子・樋口直人. 2010. 在学率と通学率から見る在日外国人青少年の教育—2000年国勢調査データの分析から. 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター 8: 31-38.
- 鍛冶致. 2007. 中国出身生徒の進路規定要因—大阪の中国帰国生徒を中心に. 教育社会学研究第 80: 331-349.
- 志水宏吉. 2008. ニューカマーと日本の学校. 志水宏吉編. 高校を生きるニューカマー. 明石書店.
- 高谷幸・大曲由起子・樋口直人・鍛冶致. 2013. 2005年国勢調査にみる外国人の教育—外国人青少年の家庭背景・進学・結婚—. 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要 35: 59-76.

金 宣吉、志岐 良子

Factors Related to Ensuring the Education of Foreign Children: The Practice of Educational Support at Kobe Foreigners Friendship Center

Songil Kim and Yoshiko Shiki
(Kobe Foreigners Friendship Center)

Since Japan ratified the Convention on the Status of Refugees in the 1980s and 1990s, the number of refugees from Indo-China has increased rapidly. Furthermore, as the Immigration Control Law was reformed and the qualifications for status of residence for Japanese descendants were changed, the number of remaining Japanese descendants in China who repatriated to Japan also increased. In addition, the number of mixed marriages between Japanese and foreigners increased rapidly. Under these circumstances, there has also been a rapid increase in the children in Japan who have foreign roots. An economically advanced society such as Japan ought to be aware of the importance of foreign children's education; however, an accurate understanding of the ratio of those who go on to higher education has not yet been sufficiently achieved. The rate of children with foreign roots who go on to higher education is conjectured to be about 50% to 70% of that of Japanese children. This is due to domestic economic conditions, learning environments, and educational problems that affect migrant families. First, in order to properly consider educational support for the children with foreign roots, it is essential to grasp what kinds of difficulties are hindering their progress. In this article, we consider the learning support practice of an NPO in Nagata-ward, Kobe-city. This area was chosen for the investigation as it has had a high population of foreign migrants for many years. Regarding learning support, it is also necessary to consider how the mother-culture is passed down to the children in foreign migrant families, and the selection of ethnic names. In addition, we need to consider Japan as the host society where these children grow up, and in particular what changes it needs to achieve regarding how it accepts and deals with them.

Keywords : children in Japan who have foreign roots, educational support, learning support